

第5回弓ヶ浜セミナー（2014年11月21日開催）

明治短歌史における御歌所の意義*

The Significance of Outadokoro in the Tanka Style Poetry
in Meiji Era Japan

長福 香菜**
Kana CHOFUKU

概要

御歌所は、明治2年11月に侍従候所に歌道御用を取り扱わせたことに由来し、その後の改編を経て、明治21年6月に設置された。御歌所に所属する歌人らを総称して御歌所派、または宮内省派と呼称し、彼らは歌壇の権威として君臨していた。しかしながら、与謝野鉄幹や正岡子規によって旧態依然とした作歌態度を固持しているとして批判を受けて以来、彼らの価値観は無批判に踏襲され、近代短歌史研究においてもその見方が支配的である。そこで、本稿では、当時の価値観に即して、明治20～30年代に発行された書誌を渉猟し、当時の歌壇状況を明らかにすることにより、明治短歌史における御歌所の意義について再考する。

1. はじめに

御歌所は、明治2年11月に侍従候所に歌道御用を取り扱わせたことに由来する。明治4年には宮中に歌道御用掛が設置され、その後幾度かの改編の後、明治21年6月に設けられたのが御歌所である。御歌所には様々な流派の歌人らが混在していたが、総称して御歌所派、または宮内省派と呼称される。

御歌所派は明治の歌壇の枢要な位置を占めながら、明治27年の与謝野鉄幹「亡国の音（現代の非丈夫的和歌を罵る）」（明治27年5月10～18日、『二六新報』にて8回連載）、同31年の正岡子規「歌よみに与ふる書」（明治31年2月12日～3月4日、『日本』にて10回連載）の痛烈な批判を受けることとなる。万葉集尊重の立場から短歌の革新を求めた鉄幹と子規は、古今集に依拠する御歌所派の頑迷固陋な作歌態度を批難したのである。御歌所派が「旧派」と称される一方、鉄幹と子規は「新派」と称され、革新運動の最たる存在として位置付けられている。この新派による価値観は何ら顧慮されることなく継承され、今なお御歌所派の存在意義は否定されたままの状況にある。近代短歌史研究においてもその見方が支配的であることから、新派の側に立つ一面的な研究にと

どまっていると言える。

御歌所派歌壇の内実を顧みることなく、新派の評価に準拠する従来の研究については、疑問を呈する声がいくらかはあり、近年ようやく御歌所派に焦点を当て、明治歌壇を見直そうとする研究が見られるようになってきた。しかしながら、御歌所派歌壇研究の空白期間は長く、かつ御歌所派歌壇のはらむ問題は多岐にわたるため、今後多大な検討を要する分野であることは言うまでもない。

本稿は、鉄幹や子規に代表される短歌革新運動や新派の誕生ばかりが表立って評されてきた一方、一面的評価に甘んじてきた御歌所派歌壇の実態と歌壇状況を明らかにすることによって、明治短歌史における御歌所の意義を再考する。

2. 御歌所の設置

明治21年6月の御歌所設置に至るまでの組織の変遷を簡略に辿るとともに、御歌所設置の背景にある明治天皇の歌道専心について僅かながら触れてみたい。

(1) 組織

明治2年11月 侍従候所に歌道御用を取り扱わせる。
三條西季知が拝命。
明治4年1月 歌道御用掛を設置。
福羽美静が拝命。

* 原稿受理 平成26年12月3日

** 教養教育科

明治5年4月 八田知紀が拝命。
 明治7年1月 松平忠敏が拝命。
 明治7年4月 渡忠秋が拝命。
 明治8年5月 近藤芳樹が拝命。
 明治9年4月 高崎正風が拝命。
 明治9年8月 力石重遠が拝命。
 皇学御用掛を設置。
 近藤芳樹が拝命
 明治9年10月 歌道・皇学御用掛を廃止し、文学御用掛を設置。
 三条西季知、近藤芳樹、渡忠秋、力石重遠、松平忠敏、小出繁らが拝命。
 明治19年2月 文学御用掛を廃止し、御歌掛を設置。
 御歌掛長を高崎正風が拝命。
 明治21年6月 御歌掛を廃止し、御歌所を設置。
 御歌所長を高崎正風が拝命。

正風は、明治9年に歌道御用掛を務めて以来、宮中歌壇の中心的な役割を担い、同21年の御歌所設置以降は、同45年2月28日に没するまでの間御歌所長としての職責を果たしてきた。正風は同じ薩摩藩出身で香川景樹に師事した八田知紀に歌を学んだことから、桂園派歌人として認められる。御歌所派が総じて桂園派と見なされる所以である。

御歌所には、長のみならず、主事・寄人・参候・録事が置かれ、御製御歌の拝見や女官への歌の指導、歌会始・月次歌会の準備や開催を行うことを主たる職掌としていた。

(2) 明治天皇の歌道奨励

御歌所の設置には、明治天皇の歌道に対する造詣の深さが挙げられよう。

たとえば、御歌所寄人や主事を務めた阪正臣¹は、『明治天皇紀』編纂に際して明治天皇に関する聴取を受けたときに、

明治天皇ハ御多作デ十萬首以上モ御一生ヲ通ジテ御詠ミニナツタト云フコトデアリマスガ、一番多イ日ニハ何首位御詠ミ遊バサレマシタカ²

¹ 筒井茂徳「御歌所寄人阪正臣氏談話速記」自訂本（『若木書法』7号、2008年3月）。

² 以下、資料及び雑誌、新聞記事等の引用に際しては、通行の字体に改め、振り仮名は省略し、適宜句読点・濁点・カギ括弧を補った。引用文中に私に施す括弧は〈 〉で示し、引用文に本来ある（ ）と区別した。また、傍

という質問に対して、次のように答えている。

随分多イトキハ五十首乃至百首位ハ遊バサレタデアリマセウ、〈後略〉

また、明治26年9月28日付『読売新聞』には、次のような記事が掲載されている。

宮中御歌所 宮中御歌所は所長・三頌・寄人・御歌所属を以て組織し、昨今両陛下とも日々御詠草十五題宛と御歌所へ御廻付となり、高崎所長之を添削し奉り、女官は少くも日々七、八題の詠草を廻付して添削を乞ひ、尚臨時勅題を賜はる事も屢々あり。即今の如きは殆ど日々御勅題を賜り、御歌所は中々の多忙なりと云。

両陛下の日々の詠歌が15題ずつであるのに加え、女官の日々の詠歌もあるといい、御歌所の多忙ぶりがうかがえる内容となっている。

さらに、明治44年8月10日付『朝日新聞』掲載の「宮中の歌道」と題された記事では、以下のように記されている。

▽女官詠進の和歌

▽一年中の日課

世を進め、民を導きあはれみ給ふ大御心の発露は、年頃詠じさせたまふ数の御製の上にも仰がれ、両陛下の国風に御嗜なみ深きは申すも畏き計りなり。去れば、御製御歌の拝見仰付けらるゝ高崎御歌所長の許には大抵一週一回位御使を差遣はされ、其都度少きも五六十首、多き時は二百余首の御詠をさへ下附あらせらるゝ御模様にて、御側近く奉仕せる侍従、若くは女官の方々に迄常に和歌詠進の御奨励あり。只管斯道の徳に親しむやう論したまふこそ難有けれ。△詠進と上覧 宮中には三百六十日、仮令大祭日・日曜日なりとも、一日も欠かさで毎日二首宛の御兼題を下されて歌を召さるゝ例なれば、女官達も大御心の深き思召を畏みて、朝夕片時も和歌の心掛けを忘るゝ事なく、御用繁き中にては御題の詠進を此上なき楽みとなし居るが、其詠み出でし歌どもは、先づ美濃奉書に認めて御前に奉呈し、両陛下御覧の分は之を御歌所に下げられ、高崎所長は鎌田・大口両寄人をして添削せしめ、心詞の佳なるものは更に本人に通じて色紙に謹書せしめ、然る後更ためて御前に奉進する定めなり。

「御製御歌の拝見」を仰せつかる正風のもとには、週1回、5、60首から200首の歌が下されるといい、また両陛下は「侍従」「女官」に歌の詠進を奨励しており、特

線は私に付した。

に女官に対しては、「毎日二首宛」の兼題を与え、歌の詠進を求めているという。

このように、明治天皇は自ら歌道に精進するのに加え、女官などにも積極的に歌道の奨励を行っていたのである。

3. 近代短歌史における御歌所の位置

御歌所については、歌に関する辞典や短歌史研究などを通覧すれば、その梗概をほぼ把握することができる。それは、御歌所に関する唯一の研究書と言える、恒川平一の『御歌所の研究』（1936年 還暦記念出版会）が寄与するところが大きいと言えよう。『御歌所の研究』は、御歌所の沿革や職制、歌会始、御歌所の職務を担当した主な歌人らの伝記、及び詠歌といったように、御歌所の機関としての枠組みだけでなく、その機能を精細に記しており、御歌所が論述において触れられる際に必ず参照される貴重な研究である。よって、『御歌所の研究』が果たす役割は極めて大きいのである。しかし、裏を返せば、依然として全面的に『御歌所の研究』に頼らなければならないほど、御歌所研究は滞っており、進展が見られないということなのである。御歌所派歌人らの個々の研究については、昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』において、八田知紀や正風、福羽美静、黒川真頼、小出榮、大口鯛二らが取り上げられ、また数編の先行論文を見るにとどまる。それらは、経歴や歌論、詠歌を断片的に扱っている場合が多く、御歌所における彼らの姿や活動、功績を詳らかにしたものではない。

さらに、近代短歌史研究では、小泉荃三が『近代短歌史 明治篇』（1955年 白楊社）において、御歌所派の歌を「近世期継承の和歌」と定義付け、和歌改良や短歌革新の動き、そして新派の発生という過程を体系付けて整理している。以後、短歌史研究の多くが、小泉の論を基礎としている。その中で小泉³は、

果して御歌所派の歌人が一派を形成するだけの表現様式を持っていたらうか。彼らは御歌所を中心として集合した漠然たる存在にすぎない。

と述べ、御歌所派歌人らが「一派」を成すだけの力量は持ち合わせていなかったとし、御歌所派の存在価値を認めていない。御歌所派に対する否定的な見解は、他にも見られる。武川忠一⁴は、

明治二十年代前半までは、論が先行する時代であった。論の先行は、革新に際しての常ではあるが、短歌が長い伝統を持ち、伝統は重い足かせにもなっていた。

と述べており、当時の短歌の多くが依拠していた「伝統」を短歌革新には不必要のものであるとした。

さらに、木俣修⁵は、「歌よみに与ふる書」を引用して、〈前略〉「香川景樹は古今貫之崇拜にて見識の低きことは今更申す迄も無之候。」といったようなことが随所に出ているわけであるがこの強烈無比の古今集否定は旧派にとどめをさすことになったのであるが、同時にそれ以後の歌壇における古今集の評価を決定的なものとしてしまったおもむきがある。〈中略〉

こうして古今集は明治三十年代において、歌壇に占める座というものを全くといってよいほど失ってしまったのである。

と述べ、子規の発言が御歌所派歌壇へ決定的な打撃を与えたとの認識を示している。そして、

和歌史的に、あるいは文化的に古今集は明治以後今日まで多くの学者によつて論究が遂げられ、その史的意味とか、その美の特質とかが極めて精細に明らかにされてきている。そしてその価値についての新しい発見もなされている。それはそれとして理解もでき、共感もされるのであるが、しかしその文学態度と表現様式は近代現代を通じての歌壇においては全く交渉のないものとして終つた。このことは誰も否定することはできないであろう。そしておそらく再び古今集の表現が歌壇に復活するということはないであろうと思われる。

もう一度最後にいうならば、古今集という歌集は近代の短歌史におけるもつとも不幸な歌集であつた。すくなくとも明治三十年代以降の歌壇を形成した歌人たちの誰一人それを典範とするものがなかつたのである。

と述べており、明治30年代を契機に、歌壇において古今集の存在が消滅したと結論付けているのである。

また、揖斐高⁶は、

文学講座 第9巻 近代の短歌』所収、1994年1月 勉誠社）。

⁵ 木俣修「古今集の表現と現代」（『国文学解釈と鑑賞』35巻2号、1970年2月）。

⁶ 揖斐高「和歌改良論—新体詩と長歌改良、そして短歌革新への道」（浅田徹氏他編『和歌をひらく 第5巻 帝国の和歌』所収、2006年6月 岩波書店）。

³ 小泉荃三『近代短歌史 明治篇』（1955年 白楊社）所収「第四章 近世期継承和歌の円熟及び其再生と近代意識の萌芽」。

⁴ 武川忠一「近代」への歩み—革新の達成—（『和歌

その第二回「再び歌よみに与ふる書」の冒頭に、旧派の歌人たちが標準とした歌集と歌人を指して「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候」と一刀両断に切り捨てたのはあまりにも有名であるが、これまで概観してきたように、子規がこれを書いた明治三一年という時点では、旧派和歌と新派和歌の消長はほぼ決しており、旧派の因循は子規が改めて指摘するまでもなかったとも言えるわけで、(後略)

と、明治 31 年時には新派が御歌所派に取って代わり、歌壇の中心勢力になっていたとの見解を示しており、すでにこの当時の御歌所派の存在意義を否定している。

このように、これまでの御歌所や短歌史に関する多くの先行研究では、新派の視点を基軸として下された一面的な低い評価が御歌所派歌壇全体の評価に直結している。しかし、これは当時の歌壇状況と御歌所派の実態を蔑ろにしたまま無批判に踏襲されてきた見解である。

4. 明治期の歌壇状況

従来の御歌所派歌壇の評価に再検討を加えるべく、明治 20～30 年代に発行された短歌に関する雑誌や新聞などの書誌を渉猟し、以下当時の歌壇状況の実態を明らかにする⁷。

まず、明治 24 年 5 月 20 日付の『日本』には、「現今和歌十大家」の選出結果を知らせる記事が掲載されている。

●現今和歌十大家 しきしま第五号に於て募集したる結果は左の如し

高崎正風 福羽美静 小出 繁 小中村清矩
 税所敦子 黒川真頼 鈴木重嶺 本居 豊頼
 松の門三草子 近藤芳介

「亡国の音」発表の三年前、和歌の大家として 10 名の内、6 名の御歌所派歌人が選出されている。その後、鉄幹と子規の登場以後の明治 32 年の『太陽』5 巻 6 号(明治 32 年 3 月 20 日)では、明治十二傑の投票が行われている。このとき「十二歌匠」の第 1 回目の投票結果が披露されており、1 位は正風、2 位は税所敦子であった。敦子は正風と同じく薩摩閩に属する桂園派歌人であり、女官として宮中に出仕し、昭憲皇太后の歌の相手を務め

た人物である。続く 5 巻 7 号(明治 32 年 4 月 5 日)の第 2 回目の結果発表では 1 位正風、2 位に佐佐木信綱が続き、3 位には敦子が名前を連ねている。5 巻 9 号(明治 32 年 4 月 25 日)では最終となる第 3 回目の結果が掲げられている。

○十二傑歌匠投票結果(第三回披露)

二一二三	高崎正風男	一八九二	税所敦子君
一八三二	佐佐木信綱君	一三六九	本居豊頼君
一〇二一	黒川真頼君	九七六	東久世通禧伯
九六五	小出 繁君	八五四	中村秋香君
八五二	阪正 臣君	八四九	大口鯛二君
八三六	黒田清綱子	八二六	海上胤平君

(後略)

信綱と海上胤平の二人を除けば、あとは御歌所派歌人が占めており、鉄幹・子規の登場を見ても当時の人々の票が彼らに集中していたことが分かる。つまり、当時の歌壇において御歌所派が支持されていたことを証明する結果となっているのである。

明治 30 年以降に限ってみても、御歌所派勢力の衰微をうかがい知ることはできず、同 30 年 10 月「御歌所官制」の布達によって職掌が明示され、御歌所の拡充が行われていることから、むしろ勢力の拡大が図られていると言えよう。

子規の第 1 回目の「歌よみに与ふる書」発表の前日、短歌雑誌『心の花』が創刊された。『心の花』は竹柏会を主宰した信綱を中心に発行され、御歌所派と新派の論争の最中、一方に偏向することを極力避け、折衷的立場を標榜した雑誌である。その『心の花』1 号(明治 31 年 2 月 11 日)の巻頭欄を飾ったのは、「歌の眼目」と題された正風の一文である。

歌の眼目とする所は、紀氏が「心におもふことを見るもの聞くものにつけていひだせるなり」といはれたる、この思ふことをいひだすにあり。

この冒頭は、古今集の仮名序を最も重視していた正風が歌論を語る際の常套句である。雑誌の巻頭は、概して時代の潮流を反映する場所と言えよう。つまり、この正風の歌論が『心の花』創刊号の巻頭を飾ったことから、御歌所派が当時の歌壇の主流であったことを示しているのである。

『心の花』創刊号は、同月に発行された『國學院雑誌』4 巻 4 号(明治 31 年 2 月 20 日)においても紹介され、初号には、高崎正風氏の歌の眼目、阪正臣氏の歌語の雅俗など、この路にとりては、有益なる説ども見えたり。

とあるように、御歌所派の言説が詠歌に際して大変重ん

⁷ 当時の歌壇状況については、拙稿「明治御歌所派歌壇の再検討—鉄幹・子規による批判をめぐって—」(『国文学攷』201 号、2009 年 3 月)において詳述しているので、そちらも参照されたい。

じられていたということが言えるであろう。

また、子規の批判から一年半後、正風は『心の花』2巻8号の巻頭欄を再び飾ることとなる。「歌の眼目」同様、常套句を用い、一貫して古今集尊重の遵守を主張している。

明治30年以降、子規の登場を見ても、御歌所派の言説は豊富に見られ、かつそのような発表の場を提供されていたのである。つまり、鉄幹・子規は御歌所派の組織瓦解につながるような本質的な痛手を与えることができなかったばかりか、御歌所派の存在や地位を揺るがすほどの力も持ち得なかったのである。そのことは、鉄幹と子規も痛感していたようで、『日本附録週報』掲載の「短歌を募る辞」(明治32年12月4日)において、子規は次のように述べている。

固より昨年以前に多少の萌芽を含みし革新派は、昨年以後いちじるしく其枝葉を伸ばして今は、や誰の目にも見らるゝ程になりぬ。従ひて、中央にも地方にも新聞に雑誌に往々新派と称する歌の載せられたるを見る。されど、従来の陳腐なる歌を載せたる新聞雑誌の数にくらぶれば百の一にも当らず。

子規の御歌所派批判から5年後、鉄幹は「今年の短歌壇(上)」(『明星』卯歳2号、明治36年2月1日)において、

○此に短歌と云ふのは世に謂ふ新派和歌を指すので、数に於て依然として大多数を占めて居る旧歌人等の作は我等の間ふ所で無い。〈中略〉

○現今の新派歌人中、われ等新詩社中の短歌作者を除いて、其以外の□⁸立つ諸氏を云へば、落合直文先生、佐々木信綱氏、尾上柴舟氏、久保猪之吉氏、服部躬治氏、金子薫園氏等に何人も指を屈する。そして又以上の諸氏を圍繞して居る新歌人は少からぬ事である。勿論数に於ては旧歌人の千分の一にも当るまいが、我等の味方、即ち新歌人たり新歌人の謳歌者たる人々は、新智識ある少壮の間に多いのは事実で、夫故実際の勢力は月毎に加はると見て差支が無い。

と述べ、明治36年当時の歌壇について、新派歌人に比べて旧派歌人の数が圧倒的に多い状況を自ら述べている。少なくとも先に掲げた小泉をはじめとして木俣などが断言する状況とは、実態が異なることが明白である。

5. おわりに

鉄幹・子規の激烈な批判を浴びて以来、存在価値を認められてこなかった明治の御歌所派であるが、当時の歌壇状況からは確固たる御歌所派尊重の意識がうかがえ、鉄幹・子規の攻撃が必ずしも広汎な支持を得てはおらず、後に新派によって固定化された低い評価などは存在しなかった。つまり、明治30年以降も御歌所派の勢力は保持し続けられたということが言える。

今後は、引き続き明治時代の価値観に即して評価を行うという視点に立ちながら、御歌所派の歌壇史や表現論の双方から考究することにより、明治短歌史の再構築を目指す予定である。

⁸ 版面不良。